

第3期中学生財務塾の開講

2018年度は、第3期生として12名（中学3年生2名、2年生2名、1年生8名）を迎えた。以前から継続して通う受講者は8名（高校生2名、中学生6名）である。新入生と在来生の学習進度が異なるため、教職課程を履修する有志の学生をスタッフに加え、講座を分けて運営した。開講日程は以下に掲げた通りである。

原則として宿題を課さないため、週1回の講座のみで簿記検定に合格することは困難だが、それでも約1年間の学習で全商簿記実務検定試験3級に3名、約2年がかりで日商簿記検定試験3級に2名が合格した。第3期生に対しては、一つ一つの階段を、一人一人に達成感を持たせながら上らせるべきであるという、これまでの反省を踏まえ、全商簿記3級を登竜門として設定した。

中学生のなかには簿記という新しい世界を知りたいという好奇心を持って参加している者もあり、楽しくにぎやかな講座が展開できた日も多かった。

第3期生のなかには、中学校の生活には馴染めずに不登校になっているものの中学

2018年度中学生財務塾全日程

回	月 日	開始	会場
開講式	5月12日	9:00	512 講義室
1	5月19日	9:00	6402 講義室
2	5月26日	9:00	512 講義室
3	6月1日	19:00	512 講義室
4	6月9日	9:00	512 講義室
5	6月16日	9:00	512 講義室
6	6月23日	9:00	512 講義室
7	6月30日	9:00	512 講義室

8	7月6日	19:00	512 講義室
9	7月14日	9:00	512 講義室
10	7月19日	19:00	512 講義室
11	7月26日	19:00	512 講義室
12	8月4日	13:00	512 講義室
13	8月9日	19:00	512 講義室
14	8月17日	19:00	512 講義室
15	8月24日	19:00	512 講義室
16	8月31日	19:00	512 講義室
17	9月7日	19:00	512 講義室
18	9月14日	19:00	512 講義室
19	9月21日	19:00	512 講義室
20	9月28日	19:00	512 講義室
21	10月5日	19:00	512 講義室
22	10月12日	19:00	512 講義室
23	10月19日	19:00	512 講義室
24	10月26日	19:00	512 講義室
25	11月3日	19:00	512 講義室
26	11月9日	9:00	512 講義室
27	11月16日	9:00	512 講義室
28	11月23日	19:00	512 講義室
29	11月30日	19:00	512 講義室
30	12月7日	19:00	512 講義室
31	12月14日	19:00	512 講義室
32	12月21日	19:00	512 講義室
33	12月28日	19:00	512 講義室
34	1月11日	19:00	512 講義室
35	1月18日	19:00	512 講義室
36	1月25日	19:00	512 講義室
37	2月1日	19:00	512 講義室
38	2月8日	19:00	512 講義室
39	2月15日	19:00	512 講義室
40	2月22日	19:00	512 講義室
41	3月1日	19:00	512 講義室
42	3月8日	19:00	512 講義室
修了式	3月11日	16:30	第1会議室

生財務塾には参加できるという受講者がいた。指導に当たった教員は、当初そのことを知らなかったが、やがて知ることとなった。その受講者は大変努力し、見事、全商簿記3級に合格した。

当該受講者は、この合格によって自信を深めたためか、さらに熱心に学習に取り組むようになり、第一希望だった高等学校にも入学することができた。合格証書を手にした嬉しそうな笑顔が忘れられない。現在も日商簿記3級の合格を目指して財務塾に通っている。

生徒を見守る全ての大人が、生徒の成功体験と一緒に喜び、認め、褒めて育てていこうとする姿勢を持ち合わせていたならば、学校に通うことを苦にして不登校になる生徒を少しでも減らすことができるのではないだろうか。

修了式には、受講者のほぼ全員が出席し、森下伊三男副学長から一人一人に修了証書が手渡された。また、ご臨席の瑞穂市PTA連合会顧問の林孝美氏からも、学ぶことの大切さについて講話をいただいた。

瑞穂市内の三つの中学校から参加している受講者たちが、相互に交流を深め、将来瑞穂市の発展に貢献する人材へと成長していくことを願っている。既に、財務に関す

る専門的な学びを志して商業高等学校に進む受講者も現れた。こうしたなかから、朝日大学へ、さらには公認会計士へと進む者が出てくることを期待したい。

瑞穂市教育情報化支援プロジェクトの推進

2017年度から推進している瑞穂市教育情報化支援プロジェクトでは、引き続き、①小中学校の教室における情報機器の普及状況や授業における活用実態の調査、および②小学校におけるプログラミング教育のカリキュラム開発に取り組んだ。

①については、前年度の本報告において報告した2018年8月から9月にかけての質問調査に加え、2019年3月にも同内容の質問調査を実施した。いずれもウェブサイト上に設置されたもので、瑞穂市内の全ての公立小中学校の教員を対象とした。

今後も継続してデータを収集し、情報機器の活用を促進するための条件や、困難感を低減する方策について検証するとともに教育行政への提言や現職教員への研修を提供していく予定である。

②では、前回報告した実験授業の実施に向け、1月16日と29日に瑞穂市立巢南中学校教諭で情報教育支援教員の松井浩氏を朝日大学に招いて打合せを行なった。そして、予定通り、2月4日、穂積小学校において、松井氏による総合的な学習の時間(以下、総合的学習)を利用した実験授業が実施された。この授業には同校5年生を中心とする教員集団、教育委員会関係者、市議会議員、朝日大のプロジェクト構成員が参観し、補助員として教職課程を履修する学

中学生財務塾修了式にて



生5名も参加した。

その後、2月12日と13日に残りの学級で担任教員による第1回目の授業が、同月20日と26日に第2回目、そして28日と3月1日に第3回目を実施された。これら各回の授業にもプロジェクト構成員と教職課程履修学生が補助員として参加した。なお、2月28日には『読売新聞』の取材を受け、同紙の東海版に記事が掲載された。

以上の一連の実験授業を踏まえ、3月14日、15日、および4月17日にこれまでのプロジェクトの成果と課題を確認し、その後も教育委員会に進捗状況を適宜報告しながら教材の開発に取り組んだ。

6月20日、教育委員会学校教育課から小学校教員を対象とする夏季研修として開発中の教材を用いた体験講座を開催することに決定したとの連絡があった。そこで7月18日に朝日大において松井氏と日程と内容について打合せをした。講師は松井氏が務め、プロジェクト側からも補助員を派遣することとなった。7月22日に穂積小、24日に南小学校、8月1日に牛牧小学校、5日に本田小においてプログラミング教育の趣旨に関する講義と体験講座が実施された。

9月には、これまで見てきた実験授業や体験講座などを通じて明らかになった、授業中に各教材を表示させる作業が煩雑になりがちであるという課題を克服するために、アクセスを容易にするウェブサイトの開設も行なった (http://aalaboratory.michikusa.jp/proj/mizuho/mizuho_index.html)。

11月22日、穂積小における2019年度の実験授業の内容や今後のカリキュラム開発の進め方について、朝日大において再び松井氏と真剣な討議がなされた。また、翌月



プログラミング作業に熱中する児童
ら(2月28日、岐阜県瑞穂市で)

拝見
瑞穂市立穂積小

プログラミング授業 先行

転ぶ、驚く、お辞儀する。パソコンの画面上で、岐阜県瑞穂市のマスコットキャラクター「かきりん」が様々な動きを見せる。児童たちがマウスを動かして、かきりんを思い通りに操って「よし」と喜んだり、「見て見て」とクラスメートに披露したりと、夢中で楽しんでいた。

2月28日、同市立穂積小学校で行われたプログラミング授業の一コマだ。

プログラミングは、コンピュータやロボットなどを動かすための「命令書」を作る作業で、命令書が適切なものでなければ、狙い通りの動きをさせることはできない。コンピュータ教育の重要性が増す中、小学校では、2020年度からプログラミング教育が必修化される。

同校は、市教育委員会からプログラミング教育のモデル校に指定され、必修化に先駆け、今年1月から5年生の総合的な学習の時間で、プログラミングの授業を始めた。

「この日の授業では、児童らに「かきりんを学校に登場させる」という課題を与えられ、「上へマウス歩く」「右にマウス歩く」などの動きを組み合わせて、学校に行き着くように適切なプログラムを組ませた。

ゴールまでの過程は自由で、道中にたぐの木々を置き、それを避けるようにかきりんを動かす複雑なプログラムを完成させた児童もおり、児童らは、お互いのプログラムを見せ合うなどして、コンピュター室は活気にあふれた。

授業は、市が指導計画の作成や教材開発などについて連携協定を結ぶ朝日大教職課程センター(岐阜県瑞穂市)の協力を得ており、授業をサポートした同センターの足立淳・准教授は「かきりんは感情表現させたり、物語を考えたりする」とを通じて、論理的思考力が養われる。目的に向かって試行錯誤する力は、いづれ社会でも役立つ」とプログラミング教育の重要性を説く。同校では、19年度からほかの学年にも授業を展開する予定で、市内のほかの小学校でも教職研修が行われる予定だ。

児童たちにも好評のようで、穂積小5年の堀玄太郎君(11)は「難しい課題を完成させたときにうれしくなる。授業が面白かった」と笑顔で話した。

『読売新聞』(2019年3月14日)

25日にもプロジェクト構成員のなかで検討と調整を図り、前年度は5年生を対象として実験した教材を4年生へと引き下げることで、また、高学年に対しては新たな教材を提案することが決定した。

上述の基本方針に基づき、2020年1月10日に穂積小において開催されたプログラミング教育の推進に関する研修会に参加し、これまで開発を進めてきた教材と、今後展

開したいカリキュラムの構想について提案した。2020年1月15日現在、穂積小の要望を聞きながら、2月中旬以降の実験授業の実施に向けて準備を進めている。

高大連携・接続によるアクティブ・ラーニング研究会の開催

2019年2月1日、第4回の高大連携・接続によるアクティブ・ラーニング研究会を6号館学生ホールにおいて13時30分より開催した。46名の参加者を得ることができ、二人の講師をお招きして国語科の授業を主題とした活発な討議の場を提供することができた。

まず、多治見西高等学校の湯原定雄氏から、鈴木孝夫の評論文「ものとことば」を教材とした、文章の内容を大づかみする構造よみ、論理関係を把握する論理よみを踏まえて文章を評価・批判するという吟味よみの模擬授業を実施していただいた。全体討議を通じて、教師自身の緻密で批判的な教材研究こそが、世の中の言説を鵜呑みにせず、吟味する力を生徒に獲得させていくための鍵であることが提起された。

続いて、岐阜県立本巣松陽高等学校の杉江祐子氏（2019年度から岐阜県立大垣北高等学校）から、杉江氏自身が推進した学校改革の概要と、その中核に位置づけられていた授業改善の取組について、具体的な事例を交えて報告がなされた。

杉江氏の報告においては、授業改善の要点を「わかる」（＝深い発問の準備と断片的な知識の構造化）・「つながる」（＝自分の言葉による説明と良い質問の創出）・「ふかまる」（＝自己変容を自覚する評価と自分と社

会とのつながりの認知）に整理して捉える視点が紹介された。そして、生徒が『源氏物語』の魅力をポスター・セッションで伝えるという授業実践を事例として、上記三つの要点がいかにより具現化されるのかが、実際に用いられたワークシートやジグソー活動、ループリックを示しつつ解説された。

また、第4回研究会では、参加者を九つの班に編成し、各班に電子黒板と同期したタブレット端末を配置して情報を共有できるようにしたうえで授業実践交流も試みられた。十分な時間を確保できなかったが、研究会の運営面に関する改善も図られた。

さらに、8月22日13時30分から、同じく学生ホールにて第5回研究会が開催された。岐阜県内の英語科の教諭を中心に31名が出席した。前半では朝日大学法学部法学科および英語教育センターの亀谷みゆき准教授による基調講演があり、休憩を挟んで後半は、参加者全員による授業実践交流の場を設けた。

亀谷氏からは、生徒の発信力を高める授業づくりの留意点として①複数の技能を統合した言語活動を充実させること、②そのためには思考力の育成が鍵になること（正解が一つしかない発問と、生徒の数だけ答えがある発問、最適解を探し出す発問との



授業実践交流の様子

バランスが大切である)、③言語活動を軸に小中高の英語教育をつなげること(全国学力・学習状況調査や大学入学共通テストのプレテストからも、授業づくりや評価の工夫、中高連携について学ぶことがたくさんある)、④言語活動とは何かを理解すること(理解や定着のためではなく、既習事項を活用して考えや気持ちを伝え合う活動のことを指す)、⑤目標と指導・評価を一体化させること、が提起された。そして、かつて高等学校の教諭として亀谷氏自身が実践した授業の動画を鑑賞しながら、生徒の発信力の高まりが具体的にどのような姿として現れてくるのかを確認した。

授業実践交流においては、参加者の勤務校における日頃の取組や工夫、苦労や困難さについて率直な意見交換がなされた。そして、各班に配置されたタブレット端末に入力された議論の要点を無線通信で集約して全体に共有し、活発な討議がなされた。

第6回は、2020年1月31日13時30分から同会場で開催される。三重県にある私立高田学苑高田中学校・高等学校で数学を担当されている岩佐純巨氏を招聘し、数学の授業づくりについて討議を行なう予定である。その詳細については本誌次号において報告することにした。

朝日大学エクステンション・カレッジの企画運営

2019年10月より、教職課程センターが主催する事業として朝日大学エクステンション・カレッジという名称で市民講座を立ち上げた。これは、地域社会に生きる市民の生涯を通じた学びや学び直しの機会を支



エクステンション・カレッジの様子

援することを目的としたものである。既にも他大学が実施している市民講座が多数あるが、講師が各会場に出向いて行なう点に本講座の特色がある。

会場は岐阜市生涯学習センター内ハートフルスクエア G、瑞穂市総合センター、そして朝日大学5号館の3ヶ所とした。受講料は1回500円(テキスト代含)、全ての講座を土曜日に設定することとした。募集は7月22日金曜日から8月22日木曜日までの1ヶ月、各講座は10月5日から3月7日までの約半年の間に実施された。

企画に際し、岐阜市・瑞穂市・岐阜県教育委員会・岐阜市教育委員会・瑞穂市教育委員会・各務原市教育委員会からの後援を受けた。各市町村の公共施設にパンフレットを配置するとともに、岐阜市・瑞穂市の広報誌や『岐阜新聞』に広告を掲載して広く募集を行なった。また、QRコードを活用してアクセスを容易にし、朝日大学のウェブサイト上で簡単に申し込めるように工夫も凝らした。

具体的な講座名、担当者名、講座回数および受講者数は、次頁に掲載した表の通りである。受講者の年齢は10代から80代までと幅広く、受講目的も「学び直しのため」、

「教養を深めるため」、「老後の生活を豊かにするため」など、様々であった。多くの受講者が「学びたい」という旺盛な意欲を有しており、講師を務めた大学教員の方がかえって大いに刺激を受け、各回の講座にも熱が入った。次年度以降は、受講者の需要にも応えながら、講座の回数と内容を一層充実させていく予定である。

ハートフルスクエア G (岐阜市)

講座名	担当者名	講座回数	受講者数
学び直し世界の歴史	虫賀	7	33
高校野球	小川 藤田	3	8
古文書講座	山下	8	19
学び舎の歴史	豊田	3	5
岐阜県の民俗芸能	虫賀	1	17
どこが変わる小学校英語	亀谷	1	9
教育勅語について考える	足立	1	7

瑞穂市総合センター (瑞穂市)

講座名	担当者名	講座回数	受講者数
高校野球	小川 藤田	3	12
教育勅語について考える	足立	1	2

朝日大学 5 号館 (瑞穂市)

講座名	担当者名	講座回数	受講者数
簿記入門	服部	10	11

学生ボランティアの派遣

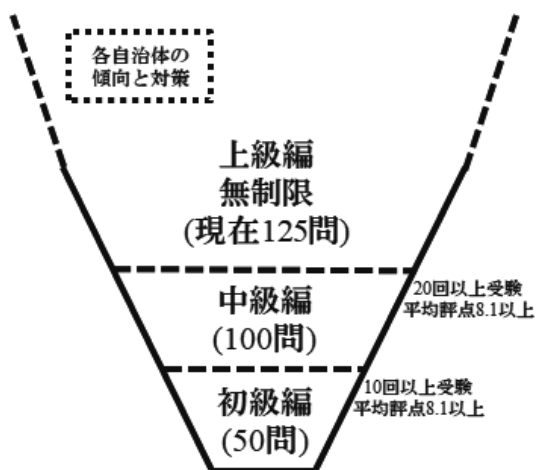
前年度と同様、岐阜県立羽島特別支援学校に学生ボランティアを派遣した。当初 10 名の教職課程履修学生が希望したが、当日、インフルエンザのため 1 名が不参加となった。2019 年 12 月 7 日の 8 時 30 分から 16 時まで学校祭の補助員として会場の設営や物品の搬送、食堂（喫茶店）での接客、生徒が制作した商品の販売活動、清掃・後片付けなどに取り組んだ。

4 年生のなかには 3 度目の参加となる者もあり、指示に従って円滑に作業をこなす姿が印象的であった。参加者からは「貴重な経験をすることができて、感謝しています」といった感想が寄せられた。他方、羽島特支からは「朝日大学の学生さんに大変助けていただき、ありがたかったです」との感謝の言葉を伝えられた。

今後も、継続的に学生をボランティアとして派遣し、学校教育現場への貢献と学生の教職に対する動機づけや適性の向上を図っていきたい。

教職課程 Moodle の運用

教員採用試験において問われる教職教養への対策として 2017 年度に開設された教職課程 Moodle は、2018 年度末に①問題バンク内部の構造化、②解説文や補足文の付記、③学習の達成度の可視化の三つの改善が施され、継続的に運用されてきた。その後、受験回数は順調に伸び、2020 年 1 月 15 日現在、初級編 979 回、中級編 567 回、上級編 504 回となっている。また、合格者数は初級編 13 名、中級編 8 名、上級編 2 名と



教職課程 Moodle の問題バンクの内部構造

なっている。各級の合格基準を満たすと学籍番号が表示され、より上の級に進むことが許されるようになっている。

以上の仕組を整え、受験の頻度や成績の推移を分析して教職課程履修学生一人一人の学習上の課題を把握するように努めてきた。そして、教職課程センターの運営にかかる会議の場で各学科の教員に対して情報を提供したり、模試の受験料の補助に際しての参考資料としたり、個別指導や励ましを行なったりしてきた。

さらに、2019 年度には商業科・地歴公民科・保健体育科といった専門教養の問題バンクも新たに設置され、漸次、問題数を増やす取組が進められてきた。今後も、これらの努力を継続するとともに、より細やかな指導や支援を実現していきたい。

朝日大学全学教職課程電子履修カルテの設計と開発

既報の通り、教職指導における教職員の負担軽減と、全学／各学科教員養成理念と整合性の高い教員養成教育の実現を目的と

して、2017 年度から朝日大学全学教職課程電子履修カルテの設計と開発を進めてきた。

2019 年度は、前年度に作成した各学科のカリキュラム・マップを突き合わせ、それぞれに記載された資質・能力に関する文言や分量の調整を図った。そのうえで、どのようなシステムによって電子化を実現することが最も合理的かを慎重に検討するとともに、3 年次後期に開講されている教育実習指導Ⅰの受講者を対象として上述の資質・能力の習得状況に関する自己評価に試験的に取り組ませ、カリキュラム・マップの妥当性を検証した。

今後は、前年度からの懸案となっている 4 年次後期の教職実践演習の見直しと教職課程全体の整合性の向上、試行版のシステムの構築と検証を通じた教職指導の省力化と効率化を実現する電子履修カルテの望ましい在り方について検討を進めていく予定である。

教職課程履修学生数と過去 5 年間の教員免許状の取得状況

最後に、2019 年度の教職課程履修学生数と過去 5 年間の教員免許状の取得状況について、次頁に報告しておきたい。

教職課程履修学生については、学部 1 年生は教職課程の履修を希望する入学生を対象とした 4 月初めのガイダンスの出席者を、2 年生は新年度に向けた教職課程ガイダンスの出席者を、3 年生は教育実習を希望する者のうち、受入校の内諾を得ている者を、4 年生は教育実習を予定している者を記載している。なお、大学院生および科目等履修生で教職課程を履修している者はいない。

2019 年度教職課程履修学生数

学部・学科	1 年	2 年	3 年	4 年	計
法学部 法学科	16	11	6	1	34
経営学部 経営学科	12	7	5	7	31
経営学部 ビジネス企画学科	—	—	—	6	6
保健医療学部 健康スポーツ科学科	80	51	35	—	166
総計	108	69	46	14	237

過去 5 年間の教員免許状の取得状況 (2019 年 3 月 31 日現在)

年度	免許状の種類（教科）									合計 (件)	合計 (人)
	一種免許状					専修免許状					
	中	高				中	高				
	社会	地理 歴史	公民	商業	情報	社会	公民	商業	情報		
2014	14	16	15	25	2	0	0	0	0	72	44
2015	7	6	11	11	2	0	0	0	0	37	24
2016	14	13	19	15	2	0	0	0	0	63	36
2017	10	11	12	10	—	0	0	0	0	43	22
2018	5	8	4	13	—	0	0	0	0	30	22
合計	50	54	61	74	6	0	0	0	0	245	148

研究会通信

第7号
2019年2月

大盛況の第四回研究会

前回と同数の四六名ものご参加を賜り、第四回研究会も大盛況となりました。ま



当日の研究会場（朝日大学6号館学生ホール）の様子

ずもって皆さまに厚く御礼申し上げます。

二〇一九年二月一日（金）一三時三〇分に開会した第四回研究会は、多治見西高等学校の湯原定雄先生、岐阜県立本巣松陽高等学校の杉江祐子先生を講師にお迎えし、国語科の授業について考える貴重な場となりました。

まず湯原先生からは鈴木孝夫著「ものことば」を教材に、文章の内容を大づかみする構造よみ、論理関係を把握する論章を評価・批判するという吟味よみの模範授業を実施していただきました。また全体討議を通じて教師自身の緻密で批判的な教材研究こそが、世の中の言説を鵜呑みにせず、吟味する力を生徒に身につけ

させていくための鍵であることをご提起いただきました。

続いて杉江先生に



湯原先生

は、これまで尽力されてきた学校改革と、そのなかでご自身が取り組まれてきた授業改善についてご報告いただきました。

授業改善の要点を



杉江先生

わかる（深い発問の準備と断片的な知識の構造化）、つながる（自分の言葉による説明と良い質問の創出）、ふかまる（自己変容を自覚する評価と自分と社会とのつながりの認知）の三つに整理して示していただきました。

そして生徒が『源氏物語』の魅力を求

今回は、九つの班を編成し、タブレット端末と電子黒板を用いて実践交流も試みました。時間が十分確保できず、分

参加者の皆様の感想と要望

感想要望の要点を

紹介いたします。

湯原報告について

- ある理論をもとに教育実践を共有できると知識を重ねていくと実感した。
- 他の参加者と吟味よみを体験し、教材・授業研究として大変勉強になった。
- 高校生でもグループで文章を評価できるのだということが大きな収穫だった。
- 自分の専門外の教科の「協働的な学び」の実践に触れられて有意義だった。
- 教材を精読したうえで吟味よみを実践してみたいと感じた。
- 杉江報告について
- 学校全体として国語科教員としての幅広い視点からの授業デザインを知り、発見がたくさんあった。
- 学校活性化のもとに授業という考え方に非常に共感した。
- 授業と評価を一本化し、かつ、生徒の自己評価も行うこと

で自信もつく授業なのだろうと感じた。

○杉江先生の熱い語り口に感動した。

○自分の授業にかけると思いや準備が足りないと感じた。

○実践交流で各班の意見や課題を出さなければ終わってしまっただけが残念だった。

○情報機器を活用した授業展開の方法について知りたい。

○班をまたいだ交流があるとうれしい。

○配布資料を事前に読めると良かった。

○アクティブ・ラーニングと評価の一体化について学びたい。

事務局からの連絡

来年度の研究会の開催時期と内容につきましては、現在、事務局にて鋭意検討中です。決定し次第、改めてご連絡いたします。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

発行：アクティブ・ラーニング研究会事務局
事務局：朝日大学5号館服部哲明研究室内
メール：kyousyoku@alice.asahi-u.ac.jp

建学の精神 国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間性知性に富む人間を育成する



〒501-0223 岐阜県瑞穂市穂積1851
http://www.asahi-u.ac.jp/

研究会通信

第8号
2019年6月

第五回研究会のお知らせ

蒸し暑い日が続いておりませんが、会員の皆様におかれましては益々ご健勝のことと存じます。

本年度最初の研究会の予定について以下の通り決定いたしましたのでご連絡いたします。通算五回目となる次回研究会は、二〇一九年八月二二日(木)一三時三〇分より、朝日大学六号館学生ホールに

第五回研究会(予定)

- 一三時〇〇分 受付開始
- 一三時三〇分 開会の挨拶
- 一三時四〇分 基調講演・アクティブ・ラーニング型授業の設計(英語)
- 一五時〇〇分 休憩
- 一五時一〇分 質疑応答・意見交換
- 一五時三〇分 授業実践交流
- 一六時一五分 全体討議
- 一六時二五分 閉会の挨拶

が授業者として実践された高等学校の英語の授業について解説を加えていただきながら、生徒たちの思考力と発信力を育てるアクティブ・ラーニング型授業の設計について提案していただきます。そして、参加者の皆様との質疑応答や意見交換を通じて全体で理解を深めていく予定となっております。

英語科の先生方はもちろんのこと、小学校の、また中等学校、その他教科の先生方にも、ぜひお誘い合わせのうえご参加いただければと願っております。生徒たちが活き活きと学ぶ授業を実現していくための普遍的で効果的な方法論について、多様な立場からの議論が展開されることを期待しております。

「教えて考えさせる授業」の提案

朝日大学教職課程センター 虫賀 文人

現在、学習指導要領の改訂を踏まえて教師中心の「教える授業」から生徒主体の「学ぶ」授業へのパラダイム転換が求められており、各校ではアクティブ・ラーニングを導入した授業改革に取り組んでいることとします。

しかし、教師が教えずに導入から生徒に考えさせるような授業や、生徒にグループやペアでワークをさせるだけで教師が満足しているような授業に陥っているのではないのでしょうか。

十分知識(インプット)を与えないまま意見交換(アウトプット)させる授業では、到底「深い学び」に到達することはできません。東京大学の市川伸一教授は、教師が生徒に教え込むのではなく、教え込みにひたすら考えさせるのではなく、両者をバランスよく行なう授業を提唱されています。

教師の講義を受けて「わかったつもり」になっている生徒を、疑問・討論・葛藤・体験・教え合いなどを経て「わかった」に導いていく授業をどう組み立てるかが、これからの教師の腕の見せ所となります。

つまり、アクティブ・ラーニングはあくまでも学んだ知識を定着させるための手法と考えることが大切と言えます。中国春秋時代の思想家孔子の「学びて思わ



教える場面



考えさせる場面

されば則ちくらし、思いて学ばざれば則ちあやうし」という言葉にも授業のヒントが隠されていると思います。

事務局からの連絡

次回研究会でも新しい参加者の皆様を歓迎いたします。同僚やお知り合いでアクティブ・ラーニングに興味をお持ちの方や授業づくりにお悩みの方がいらつしやれば、ぜひ、ご紹介ください。研究会のご案内をお送りいたします。

発行：アクティブ・ラーニング研究会事務局
事務局：朝日大学5号館服部哲明研究室内
メール：kyousyoku@alice.asahi-u.ac.jp

建学の精神 国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間性知性に富む人間を育成する



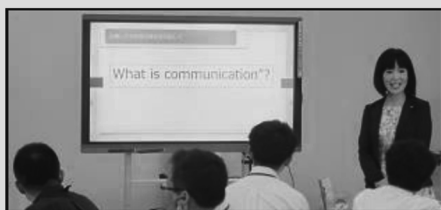
〒501-0223 岐阜県瑞穂市穂積1851
http://www.asahi-u.ac.jp/

研究会通信

第9号
2019年9月

充実の第五回研究会、成功裏に終了

二〇一九年八月二
二日(木)一三時三〇
分より、第五回研究
会が開催されました。
岐阜県内の英語科の
先生方を中心に三一
名の皆様に朝日大学
六号館学生ホールに
お集まりいただき、
大変充実した内容の
研究会となりました。
前半は、本学法学
部法学科および英語



亀谷先生の講演の様子

教育センター准教授
の亀谷みゆき先生に
基調講演をいただき、
休憩を挟んだ後半で
は、参加者全員によ
る授業実践交流の場
を設けました。
亀谷先生には、生
徒の発信力を高める
授業づくりの留意点
として、①複数の技
能を統合した言語活
動を充実させること
②そのためには思考
力の育成が鍵になる
こと(正解が一つし
かない発問と、生徒
の数だけ答えがある
発問、最適解を探し
出す発問とのバラン
スが大切)、③言語
活動を軸に小中高の
英語教育をつなげる
こと(全国学力・学
習状況調査や大学入
学共通テストのプレ
テストからも、授業
づくりや評価の工夫

小中高連携について
学ぶことがたくさん
ある)、④言語活動
とは何かを理解する
こと(理解や定着の
ためではなく、既習
事項を活用して考え
や気持ちを伝え合う
活動)、⑤目標と指
導・評価を一体化さ
せること、をご提起
いただきました。
さらに、亀谷先生
がかつて高等学校で
実践された授業の映
像を鑑賞しながら、
生徒の発信力の高ま
りが具体的にどのよ
うな姿として現れて
いるのかを解説して
いただきました。
講演後の質疑応答
では、英語自体はあ
くまでツールに過ぎ
ず、自分も発信した
いと生徒に思わせる
魅力的な発問づくり
こそが最も重要な問



授業実践交流の様子(第2班)

題であるとの指摘も
なされました。英語
科に留まらず、全て
の教科においてアク
ティブ・ラーニング
を構想するうえで
の本質を突いた議論が
展開されました。
授業実践交流にお
いては、参加者の皆
様の勤務校での日頃
の教育実践上の取組
や工夫、苦労や困難
さについて率直な意
見交換をしていただ
きました。そして、
各班の机に一台ずつ
配置したタブレット
端末に議論の要点を
入力していただき、
無線通信で集約して
全体に共有し、討議
していただきました。

参加者の皆様の感想と要望

- 参加者の皆様の感想を紹介いたします。
- 基調講演について、○生徒が考えたことや感じたことを相手に伝えたいと思うような必然性を生み出せる場面設定、雰囲気づくりをしっかりとしたいと思った。
- コミュニケーションの必然性や思考力の育成など、今後意識していくべきことを学ぶことができた。
- 授業映像のなかで、生徒たちの顔がキラキラしていて、私も楽しいと思ってもらえる授業づくりをしてみたいと思った。
- 生徒の思考力を停止させないための教師の発信力(発問)と教材研究の重要性を認識させられた。
- 実践交流について、○他校の現状や意気込みを知ることができ、モチベーションの向上につながった。
- 学力水準を言い訳にしないで、生徒の可能性を信じて少しづつでも英語で授業を行なっていきたい。
- 各学校それぞれの苦労があるなかで、少しでも良い授業を、という参加者の思いに刺激を受けた。
- 先生方とアイデアや悩みを共有でき、難しい部分もあるが頑張っていこうという気になった。
- 要望について、○平等・公平な評価の在り方についてもっと知りたい。
- また英語の授業改善についての研究会を開いてほしい。
- 新学習指導要領の良い点、悪い点を整理してほしい。

事務局からの連絡

次回研究会は、三重県高田中・高等学校で数学を担当されている岩佐純巨先生を講師にお迎えし、二〇二〇年一月三十一日(金)に開催する予定です。詳細は改めてお知らせします。

発行：アクティブ・ラーニング研究会事務局
事務局：朝日大学5号館服部哲明研究室内
メール：kyousyoku@alice.asahi-u.ac.jp

建学の精神 国際未来社会を切り開く社会性と創造性。
そして、人類普遍の人間性知性に富む人間を育成する



〒501-0223 岐阜県瑞穂市穂積1851
http://www.asahi-u.ac.jp/

研究会通信

第10号
2019年12月

第六回研究会について

冬の気配が感じられるようになってきました。皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。さて、今回の詳細が決定いたしましたので、お知らせいたします。第六回研究会は、二〇二〇年一月三十一日（金）一三時三〇分より、朝日大学六号館学生ホールにて開催いたします。いつもと同じ会場となっております。

第六回研究会
一三時〇〇分 受付開始
一三時三〇分 開会の挨拶
一三時四〇分 第一部..教科書を読む
一四時一〇分 第二部..数学的な見方・考
え方
一五時〇〇分 休憩（質問紙記入）
一五時一〇分 質疑応答
一五時三〇分 授業実践交流
一六時一五分 全体総括
一六時二五分 閉会の挨拶

現在では、勤務校のみならず全国各地の高校に出向いて示範授業（研究授業）を行ったり、高校教員を対象とする教育研究集会で講師をされたりするなど、アクティブ・ラーニングの普及にも精力的に努めておられます。「数学は積み上げではなく積み直し、今ある知識を活用すれば誰でもできるようなる」を合言葉としてアクティブ・ラーニングとしての数学の授業を推奨していらつしやいます。次回研究会は、岩佐先生からのご提案を受け、参加者を生徒に見立てて異なる二つの切り口による模擬授業を実施していただく予定です。第一部は「教科書を読む」が主題です。岩佐先生は、生

徒を探究へと向かわせる教科指導を実現するためには、彼らにとつて将来的に文献へと連なっていく教科書を読む「読み進める」力をつけることが重要であると考えられています。こうした立場から、数学Ⅱ「三角関数」を教材に、教科書をいかにか読むかを具体的に示していただきます。

続いて、第二部では「数学的な見方・考え方」を育てるための指導法を二つ紹介していただきます。一つ目は、生徒に様々な式を見せて意味を考えさせることを通じて、それらが単なる記号の羅列ではなく言語として機能するものであることを理解させるための方法です。二つ目は、次期学習指導要領では数学A「図形の性質」において作図が重視されていることを踏まえ、作図指導の在り方について考えるための手がかりをご提案いただきます。平行な三直線上にそれぞれ頂点を持つ正三角形の作図の指導事例として解説していただきます。



指導中の岩佐先生の姿

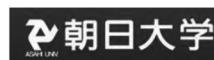
模擬授業後は岩佐先生への質疑応答の時間を確保しております。さらに、これまで参加者の皆様からご好評をいただいた授業実践交流も予定いたしました。お待ちしております。

次回研究会でも授業において子どもたちに生き生きとした学びを保障するうえで本質的で普遍的な議論が展開されるものと確信いたしております。数学をご担当しておられる先生方に限らず、幅広い皆様にご参加いただけますことを心より願っております。

事務局からの連絡
今後の研究会でも、優れた授業実践に取り組んでおられる方々を講師として招聘していく予定です。会員の皆様は是非ともお話を聴いてみたいという実践家や研究者がおられまして、ぜひ、事務局までご連絡ください。

発行：アクティブ・ラーニング研究会事務局
事務局：朝日大学5号館服部哲明研究室内
メール：kyousyoku@alice.asahi-u.ac.jp

建学の精神 国際未来社会を切り開く社会性と創造性、そして、人類普遍の人間の知性に富む人間を育成する



〒501-0223 岐阜県瑞穂市穂積1851
http://www.asahi-u.ac.jp/